

【レジュメ】

『人間喜劇』における「錬金術師たち」

(『仏文研究』19号、1988年9月、pp.43-59)

村田京子

バルザックは『人間喜劇』の様々な作品の中で錬金術を擁護し、錬金術師そのものを作中に登場させている。本論では、彼の描く錬金術師がどのようなものであったのかを検証する。

それに先立ち、西洋錬金術について少し触れておきたい。錬金術は、実際の錬金術と神秘的錬金術とに分かれ、理論的には汎生命主義と、「物質の原一性 (Unité)」の観念に基づく。錬金術師の仕事は、鉱物に潜む「金の種子」の成熟のリズムを人工的に早めると同時に、人間の意識を神の意識にまで高めることであった。

では、バルザックの作品世界における錬金術師の姿を見てみよう。その原型は初期小説にすでに現れ、Maïco-Montézumin (*Jean-Louis*), Beringheld-Sculdans II (*Centenaire*), Osterwald (*La Dernière Fée*)、『人間喜劇』では Balthazar Claës, Adam de Wierzchownia (*La Recherche de l'Absolu*), Laurent Ruggieri (*Sur Catherine de Médicis*) の名が挙げられる。これらの人物は一様に、「物質の原一性」という錬金術的な思想を擁する者である。

錬金術師の役目は、「時間」の仕事を引き受けることであるが、それは最終的には自らが「神」になることを意味する。神に対するこの不遜な考えは「百歳の人」に遡って見いだせ、『不老長寿の霊薬』のドン・ジュアンの父親やバルタザール・クラススの言葉の中に、神への冒瀆が看取できる。しかし、創造行為を目指した彼らの試みはすべて失敗する。人間は皆、時間的存在という宿命を免れ得ないのだ。そこで、バルザックにはおなじみの長寿願望が出現する。それを具現したのがゴプセック、グランデなど「吝嗇家 (avare)」たちである。彼らは単なる守銭奴ではなく、余分な生命運動を慎む「哲学者」であった。バルザックはこれら「吝嗇家」を錬金術師の範疇に入れ、彼らにその属性を付与している。

以上のように、バルザックの錬金術師に対する理解は深く、彼の描く錬金術師は「生」の秘密を追及し、時間の超越を目指す者であり、そこに作者自身の姿を重ね合わせることも可能であろう。